

博士学位論文審査報告書

大学名	早稲田大学
研究科名	スポーツ科学研究科
申請者氏名	劉 暢
学位の種類	博士（スポーツ科学）
論文題目	中国武術の発展とその日本への展開(1900-2019)-競技性と武術性の関係- The development of Chinese martial arts and their adoption in Japan from 1900 to 2019: The tension between sportification and maintaining practical combat effectiveness
論文審査員	主査 志々田文明 早稲田大学教授 博士（人間科学）（早稲田大学） 副査 友添秀則 早稲田大学教授 博士（人間科学）（早稲田大学） 副査 リー・トンプソン 早稲田大学教授 学術博士（社会学）（大阪大学）

今日の中国武術は主に套路(演武式)と散打(対抗式)の二つの形式で行われている。演武式の套路は健康増進のために行われるものもあれば、競技(套路競技)として行われるものもある。一方、対抗式の散打は主に競技として行われている。本研究は、中国武術の発展(1900-2019)と国際展開を包括的に捉える作業の一環として、競技としての中国武術(競技武術)に注目し、その形成と日本における驚異的な競技武術の普及の過程を「武術性」(実戦的実用性)という概念を用いて明らかにしている。

序章では、武術の用語と起源から、中国武術の最も基本的な特徴を実際の戦闘実践における実用性(武術性)と捉え、その上で19世紀中葉以降、近代化に伴う中国武術の競技化に関する先行研究を考察した結果、①これまでの研究では20世紀初頭から1920年代の間、そして1950年代の間における中国武術の競技化の過程が曖昧にされていること、②中国武術の競技化および国際化の過程で生じた武術性の衰退とそれに伴う競技武術の変容について検討が不十分であるとし、以下の三つの課題を設定している。

- ・課題1：本研究を貫く分析概念としての武術性について、漢字の「武」の原意を字形・字義の分析とその歴史的変遷を通して明らかにする。(第1章)
- ・課題2：競技としての中国武術の中国における展開過程(1900-2019)を解明するため、中国武術の競技化が始まる契機と、競技武術の発展過程について武術性の観点から考察する(第2章, 第3章)。
- ・課題3：日本における競技武術の普及過程(1949-2019)、およびその前段階として中国武術の日本への伝播過程(1900-1949)を解明する。(第4章, 第5章)

第1章では「武」の字形・字義の分析から武術性の概念を闡明にしている。「武」の字における定説（「止」と「戈」によって構成）に対して、「武」における「止」の部分は簡単に識別することはできるが、それ以外の「𠂔」の部分の意味は不明瞭であるとして、甲骨文(BC. 1250-BC. 1046)、金文(BC. 1075-BC. 256)、篆書(BC. 770-BC. 221)、楚系文字(BC. 475-220)、隸書(BC. 206-589)、魏晋唐宋時代の楷書(220-1279)における「武」の字形を分析している。

その結果、唐代以降、「武」の字における「戈」（武器・武力）の部分の形が崩れ「𠂔」となったことを確認している。今日存在する「武」の字義に関するいずれの説においても「𠂔」は武器、武力として解釈していることから、武器、武力による戦闘や征伐等が「武」の意味内容であるとし、その点から武器を持した戦いで要求される実戦的な実用性を「武」の原意となると結論づけた。

第2章では20世紀前半における競技武術の形成および発展過程を考察している。特にこれまでの研究で曖昧にされていた1920年代以前における競技武術の形成背景、1923年初頭の全国武術大会の性格、中央国術館主催の国術考試および土洋体育論争の影響、そして1930年代後半以降の競技武術の発展状況について、申報、大公報、雑誌『新青年』、『国術規則』4冊などの資料を用いて分析した結果、以下の知見を得ている。

(1) 20世紀初頭、軍隊から省かれたあと、中国武術は1910年代に尚武精神、軍国民教育に利用され、「国粹」として尊ばれた。1910年代後半から「民主」及び「科学」を基調とする新文化の建設が訴えられたため中国武術はその批判対象となった。その後、中国武術は人格の陶冶、健康の維持などの面における価値をアピールし、このような背景の中で競技種目として確立したことが確認された。

(2) 1923年に開かれた中華全国武術大会において、競技の性格の有無について議論がなされていた。本章では、大会の細則と新聞記事を分析した結果、当該大会は一定の基準に基づいて参加選手に優劣をつけていたことが確認された。

(3) 国術考試に関するこれまでの研究はすべて全国的な大会(国考、1928年と1933年举行)に注目していたのに対して、本章では地方の予選大会(省考)を取り上げることで、演武式と対抗式の競技における評価基準を明示している。また1932年に土洋体育論争を経て中国武術の競技化が一層推進されたことを明らかにしている。

(4) 1930年代後半の競技武術の普及状況について、先行研究で検討されていなかった『国術規則』4版(1931年、1933年、1936年、1948年)の内容を比較し、1948年版から対抗式の競技が消失して、演武式を中心に実施されるようになったことを明らかにしている。

第3章では、中華人民共和国における競技武術の形成および発展過程を分析し、以下の知見を得ている。

(1) 先行研究では中華人民共和国期(1949-現在)における競技武術に関する研究は主に1959年、初の套路競技の規則が制定された後のことについて詳述している。これに対して本章では1949年から1959年に注目し、人民日報、雑誌『新体育』、武術関係者の回想録に基づき、新しい体制下の競技武術の形成過程を明らかにした。①1952年、体育事業の方針は毛沢東や朱徳ら国家指導者の意向に沿って制定された。その方針のもと中国武術は「整理」され、1956年以降の競技大会は演武式の套路競技が中心となった。②1957年初に「双百」の方針のもと、中国武術の性質および今後の発展方向に関する議論が行われた。多くの武術家は中国武術の武術性を重視して対抗式の競技を再開するべきだという声もあったが、同年6月に中央より始められた粛清の影響でそれまで政府の方針に反対した一部の武術家は「右派分子」として弾圧され、武術の発展に関する議論は不完全なまま終息した。③以降、競技武術は政府主導のもと套路競技を中心とする競技化が進められた。

(2) 競技武術における武術性について、演武式である套路競技の『武術規則』9冊を用いて分析している。1959年に、体操競技の規則を参照することにより套路競技の『武術規則』が制定された。同『武術規則』は今日まで8回修正されているが、その過程で難度動作の導入(あるいは配点の増加)により、套路競技の技術は迅速かつ俊敏的な方向へと変化する一方、実戦

的な技を含む主要動作の数は合計8割減少したことを確認している。

第4章では、1900年から1949年まで中国武術の日本への伝播過程を考察している。日本における中国武術の受容に関する研究は全て戦後に集中しているが、戦前の日清戦争以降、大量の留学生が来日し、日本から大陸へ渡航した文化人や武術家がいた。また1931年に満洲事変、1937年に盧溝橋事変がおき、20世紀前半における日中関係は政治的にまた文化的にも緊密であった。以上から本章では収集した69件の戦前における中国武術関連資料に基づき分析した結果、以下のことを確認している。

1900年から1903年の数年間、中国武術は義和団事件あるいは当時中国とかかわりを持つ著名な人物とともに紹介された。その後、約20年間の空白期を経て、1922年以降、空手家によって中国武術が再び言及された。その内容は、当時中国国内に存在する虚実混同な説が多かった。1930年代以降、中国武術が本格的に日本に紹介されるようになり、宮本武蔵や唐手など日本人に馴染みのあるものが用いられた。また、中国武術は戦時下における大陸の情報の一部分として日本に紹介されていた。さらに、1940年には、汪兆銘政権の馬良と褚民誼がそれぞれ率いる中国武術団によって、東亜武道大会(東京)と東亜競技大会(東京・大阪)でそれぞれ演武を行った。

第5章では、中国武術に関する新聞、雑誌の報道、また日本連盟の機関誌、加えてフィールドワークや聞き取り調査を通して、1949年以降の日本における套路競技の普及する過程を分析し、またその過程で生じた競技武術への日本の影響を以下のように明らかにしている。

套路競技が来日する背景として、中華人民共和国成立(1949年)以降、日本における中国武術に関する情報は主に香港や台湾を経由して流入し、1960年代後半から、太極拳を代表とする中国武術の健身性(健康への貢献面)が注目された。このような背景の中、套路競技は1974年の中国少年武術代表団の訪日で初めて日本に紹介され、1984年に初の全日本競技大会が行われた。その後、日本武術太極拳連盟は積極的に中国武術協会と連携を取り、日本選手の派遣、中国コーチ、選手の招待などを通して日本の套路競技の実力を向上させた。2001年、中国は競技技術のオリンピック種目化を目指して客観性を前面に出す施策をとったため套路競技の武術性は一層削ぎ落とされることになった。『2005年国際武術套路競技規則』が制定される際、日本は套路競技の武術性を保存しようとしたため、試合を武術性の濃淡によって分化させ、2005年以後、套路競技種目を二つのルールによって実施するようになった。

以上のように本研究は、「武」の字形・字義の分析を踏まえた武術性の概念を用いて、近代の約120年に及ぶ中国武術の展開過程、さらに中国武術が日本への展開過程について、戦前・戦後に亘る日中両国の広範な資料を用いて実証的に検討した秀逸な歴史研究である。依って博士(スポーツ科学)の学位を授与するに十分値するものと認める。

〈原著論文〉

・劉暢,「武」の字形研究: 武道・武術文化研究の基礎付け, 体育学研究, 63(1):251-264. ISSN: 1881-7718. 2018年1月 [註: 第1章に反映]

・Chang LIU, A study of the acceptance process of Chinese martial arts in Japan from 1900-1949. Korean Journal of human movement, 4(1):33-45. ISSN: 2635-5043. April 2019 [註: 第4章に反映]

以上